

**P3-44.****Nested PCR法を用いた爪真菌症遺伝子診断法の開発及びその臨床応用**

(専攻生・皮膚科学)

○海老原睦仁

(皮膚科学)

佐藤公美子、坪井 良治

爪真菌症の起原菌は培養検査で分離同定されるが、培養陽性率が低いために、十分な検討は成されていないのが現状である。今回、爪真菌症の起原菌同定に寄与できる診断法として nested PCR法を用いた dermatophyte 及び nondermatophyte 特異的遺伝子診断法を開発し、爪真菌症の臨床検体に対する非培養系による起原菌同定の可能性について検討した。菌特異的プライマーの設計にあたっては本邦で爪から分離される頻度が比較的高いと思われる各菌種を選定した。すなわち dermatophyte では dermatophyte 共通プライマー、*T. rubrum*、*T. mentagrophytes*、nondermatophyte では *Aspergillus* spp.、*Scopulariopsis brevicaulis*、*Fusarium solani*、*Fusarium oxysporum*、*Fusarium verticillioides*、*Candida albicans*、*Candida tropicalis* の各種プライマー対を 28SrDNA 塩基配列から設計した。標準菌株から DNA を抽出し、個々のプライマー対を用いた PCR 法の特異性を確認後、未治療の爪真菌症患者の臨床検体 60 例に対し本法を施行した。その結果、83% (50/60 例) に dermatophyte、37% (22/60 例) に nondermatophyte を検出した。菌種としては、既報の分離培養の結果と同じく *T. rubrum* が高頻度に検出されたが、nondermatophyte の単独検出例も 7 例認められた。臨床像もあわせて報告する。

**P3-45.****HIV 感染患者における唾液中 TNF- $\alpha$  と口腔病変に関する研究**

(口腔外科学)

○伊能 智明、小森 康雄、中島 仁一  
千葉 博茂

【目的】 HIV 感染患者では種々のサイトカイン濃度の上昇が知られており、TNF- $\alpha$  もその一つである。また感染者に出現する原因不明の口腔、食道、肛門など

の潰瘍にサリドマイドが有効であると報告されているが、これはサリドマイドの抗 TNF 作用によるものと考えられている。そこで今回 TNF- $\alpha$  と口腔病変の関連を調べるため、HIV 感染者と健常者における唾液中 TNF- $\alpha$  の測定を行った。

【対象】 当科を受診した HIV 感染患者 29 例、および健常者 32 例を対象とした。

【結果】 HIV 感染者と健常者との唾液中 TNF- $\alpha$  値の比較では、HIV 感染者の TNF- $\alpha$  の値は 10.64 pg/ml であり、健常者の 1.91 pg/ml より有意に ( $p < 0.01$ ) 高い値であった。HIV 感染患者 29 名のうち、口腔症状がみられたものは 19 名 (65%) であった。口腔症状を有しないもの 10 名の CD4 数は平均 401.2/ $\mu$ l、HIV-RNA 量は 11,040 コピー、TNF- $\alpha$  の値は 3.93 pg/ml であったのに対し、口腔症状がみられたもの 19 名ではおのおの CD4 数は平均 236.6/ $\mu$ l、HIV-RNA 量 79,492 コピー、TNF- $\alpha$  の値は 14.18 pg/ml でいずれも有意差がみられた。この三者では、TNF- $\alpha$  と CD4 数の相関は認められなかったが、HIV-RNA 量とは相関関係が認められた ( $r = 0.5614$   $p < 0.01$ )。

**P3-46.****May-Giemsa 染色標本で分類困難な血液疾患を半日以内で鑑別診断できる電顕血小板 peroxidase 反応の開発**

(専攻生・病理学)

○山崎 家春

(病理学)

ジョンコルニー セッタコーン

トルグン トルスン、工藤 玄恵

【目的】 電顕試料作製は通常 5~6 日間要するため、結果報告の提出までには早くとも一月近くが必要となる。その時間的制約のため、光顕 May-Giemsa 染色標本で分類困難な血液疾患に対して非常に有用な電顕血小板 peroxidase 反応法も日常診療の場で活かされにくいのが実情である。そこで、電顕血小板 peroxidase 反応による血液疾患分類を翌日には報告可能にする電顕試料作製法を開発することを目的とした。

【方法】 通常の電顕試料作製工程による樹脂の浸透から重合までは 4 日間である。時間短縮の一つの方法として Hayat & Giaquinta (Tissue & Cell, 2, 191-195, 1970) の温度 100°C、1 時間重合の報告がある。重合温